

高卒就職者の離職意思 —高校 3 年時に備えられること—

○大谷哲弘 (立命館大学)

山本 奨 (岩手大学)

キーワード：高卒就職，離職意思

問題と目的

高校生の就職は、1 社のみ学校推薦を受ける慣習のもと、7 月の求人票開示から 9 月の選考までの短期間で行われる。その結果、支援期間は短くなり、生徒の納得が課題となっている (大谷ら, 2017)。また、その納得感は選考開始時期である 9 月に受験した企業とそれ以降に受験した企業では差があると予想される。さらに、早期離職で挙げられる理由は、職種や会社規模など入社後の要因に焦点を当てた報告 (e.g. 井上, 2017) が多い。この知見は有益ではあるが、高校教員には進路指導やキャリア教育と就職後の早期離職予防とのつながりを理解しにくいものである。したがって、高校時の進路指導の結果の一つと考えられる納得感などがどのように早期離職予防に寄与するのかという視点での検討が必要である。そこで本研究では、高校 3 年時の納得感等の諸要因と就職 1 年目の離職意思との関係を明らかにすることを目的とした。

方 法

時期 高校 3 年時の 6 月, 8 月, 11 月, 2 月。
就職 1 年目の 10 月～11 月。
対象 高校 3 年時 1909 人。就職 1 年目は高校 3 年時の調査 4 回全てに回答した 1516 人。
材料 「キャリア選択に対する熟考」(以下「熟考」) 8 項目、「キャリア選択に対する納得感」(以下「納得感」) 10 項目、「キャリア選択に対する上手な妥協」(以下「上手な妥協」) 4 項目、「離職意思」4 項目。また、就職先の職種と会社規模および就職内定時期。
手続き 高校時は、協力校の担任教師等をおして配布しその場で記入を求め回収した。就職 1 年目は郵送により質問紙を送り、返信を求めた。回答は任意である旨等を口頭または文書で説明するとともにフェイスシートに記す等倫理上の配慮を行った。実施に際しては関係大学の倫理委員会の承認を得た。

結 果

就職 1 年目に実施した調査に返信のあった 276 人のうち不備のあったものを削除した 241 人を分析した。各尺度の因子構造について探索的因子分析を行った。「熟考」は 8 項目 1 因子構造、「納得感」は各 5 項目 2 因子構造 (「意義」「見通し」)、「

「上手な妥協」は各 2 項目 2 因子構造 (「わりきり」「覚悟」)、「離職意思」は 4 項目 1 因子構造であった。「熟考」、「納得感」、「上手な妥協」の内的整合性を分析したところ、.679～.907 であり、尺度の項目得点の合計を尺度の得点として使用した。また、「離職意思」は主成分得点を算出し使用した。

次に、就職決定時期によって納得感が変わることが予想されるため、9 月から 10 月決定群 (202 人) と 11 月以降決定群 (39 人) に分類した。群ごとに離職意思を目的変数、「熟考」、「納得感」、「上手な妥協」を独立変数とする重回帰分析 (強制投入法) を行った。なお、職種と会社規模の影響を除くため、ダミー変数として投入した。また、多重共線性の問題を検討するために VIF を算出した。その結果、全ての値が $VIF < 3$ であり、問題を示す経験的な数値である 10 を下回るものであった (小田, 2007)。離職意思に対して、9 月から 10 月決定群では、6 月は「意義」($\beta = -.183, p < .10$)、8 月は「意義」($\beta = -.243, p < .10$) の負の有意傾向のパスが見られ、11 月は「熟考」($\beta = -.298, p < .05$) の負の有意なパスが見られた。11 月以降決定群では、6 月は「わりきり」($\beta = -.541, p < .05$)、2 月は「意義」($\beta = -.684, p < .05$) の負の有意なパスが見られ、2 月は「見通し」($\beta = .495, p < .05$) の正の有意なパスが見られた。

考 察

就職決定の群ごとに、各時期によって離職意思を予測する要因が明らかになった。9 月から 10 月決定群は、就職試験前の「意義」が離職意思を低減することが明らかになった。また、11 月の「熟考」は就職内定後に改めて考えている可能性が示唆された。一方、11 月以降決定群では、6 月に「わりきり」の得点が高いと離職意思を低減していた。また、卒業前の 2 月に「見通し」をもっていると離職意思を高めていた。これは、職業を人生の中でどのように位置づけるかを考えながら「見通し」をもって辞めていることが推察された。

以上のように高校時の離職予防支援には、適時性があり、かつ生徒の状態に合わせる必要がある。

付 記

本研究は JSPS 科研費 JP17K04838 の助成を受けて行われました。